第1例目の移植手術だけに、多くの医師らが見学に訪れた

湘南鎌倉総合病院

生体腎移植1例目に成功

脳死移植実施施設を目指す

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は昨年12月21日、同院1例目となる生体腎移植の手術を実施、成功を収めた。重症腎不全の唯一の根治療法である腎移植を実施することで、患者さんの治療の選択肢を広げるとともに、腎臓病への包括的な治療体制を確立することが狙い。同院は移植スタッフを育成し、来年をめどに脳死移植実施施設の認定を取得する方針。

包括的腎不全治療へチームワークが重要

「今後は脳死移植実施施設の認定取得も目指したい」と徳本部長

重症腎不全の治療法には、血液透析（HD）、腹膜透析（PD）、腎臓移植の3種類あり、なかでも腎移植は唯一の根治療法だ。

湘南鎌倉病院ではこれまでHD、PDを実施してきたが、患者さんの治療の選択肢を広げるため昨年、腎移植の権威である東京女子医科大学の全面協力の下、新たに腎臓移植外科を創設。また、腎臓病に対し移植を含めた包括的な治療を行うため腎臓移植外科、腎免疫血管内科、血液浄化部の3科合同の腎臓病総合医療センターを立ち上げた。

同院の小林修三・同センター長（副院長）は、「移植の前後には十分に工夫した透析療法が必要です。とくに血液型不適合の場合は抗体除去のため術前からの治療が重要です。移植後も腎機能が完全に戻るとは限らず、引き続き腎臓病の管理が必要となります」と、センター設立の経緯を説明する。

12月4日、同院講堂で行われた腎移植キックオフミーティング（プロジェクト最初の会合）には医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務職など計50人以上の関係者が集合。その半月後に迫る手術に向けたスケジュールの確認や、注意事項の伝達、患者状態の確認などを行った。

本症例は、夫婦間による血液型不適合の生体腎移植。徳本直彦・腎臓移植外科部長は、「ドナー（臓器提供者）はB型、レシピエント（移植希望者）はO型で、今回のようなケースの場合は抗A抗体、抗B抗体がともにないAB型のFFP（新鮮凍結血漿）を輸血します。輸血パックの色は白ですから、輸血型に間違いがないようチェックしてください」と全スタッフに向け、わかりやすく解説し、注意を促した。

同院は部署ごとの勉強会に加え、関連全部署が一堂に会する合同カンファレンス（会議）を2回実施。レシピエント執刀医の三宅克典医師は、「移植は当院初の試みですから、多くの人に興味をもってもらうために、移植担当者だけでなく全員参加型のカンファレンスを実施しました」と、啓発の意味を語る。

腎臓移植の種類と特徴

種類	生体腎移植	献腎移植	修復腎移植
提供元	血縁者や配偶者など、ごく近い家族からの提供	心停止もしくは脳死した善意の第三者からの提供	がん（小径がん）発症により摘出した腎を修復して提供
生着率	5年生着率約90%	5年生着率約80%	臨床研究後、経過観察中
問題点	提供に同意する家族が必要	・待機時間が長い（平均待機期間約15年） ・緊急手術を要する	保険診療未承認

生体腎移植は低侵襲短時間手術の実施を

12月21日、午前9時に移植手術を開始。ドナーの身体から腎臓が摘出され、それをレシピエントに吻合（ふんごう）開始45分後、三宅医師の口から「初尿！」（移植後初めての尿。移植腎が機能したことを示す）の第一声が上がると、見学していた同院医師らから歓声が湧き起こった。

ドナーの手術時間は約2時間30分、レシピエントの手術時間は約3時間20分で、第1例目としては、かなり速いスピードだ。徳本部長は、「当院のスタッフは優秀で勉強熱心。とても良い環境のなかで手術が行えました」と胸を張る。

三宅医師は東京女子医科大学で3カ月間の研修を受け、40例以上を経験した

腎移植には、ごく近い親族から臓器を提供してもらう生体腎移植と、心停止もしくは脳死した善意の第三者から臓器を提供してもらう献腎移植、小径がんの発症により摘出した善意の第三者の臓器からがんを切除し、修復して移植する修復腎移植がある（図）。

このなかで生体腎移植は日本で最も実施数が多いが、健康な人から臓器を取り出す。徳本部長は、「生体腎移植はドナー不足のなか、やむなく実施するものです。このため低侵襲・短時間手術でドナーの負担を軽くすることが必要です。また、摘出した臓器は必ず機能させなくてはなりません」と、移植医としての気構えを見せる。

第1例目は、今のところドナー、レシピエントともに良好な状態だ。しかし、「目的は腎移植の成功ではなく、患者さんが元気になることです」と三宅医師。移植後は免疫療法が必要になるため、他科と連携して患者さんを支えていく。

腎臓を摘出するドナーの手術と、腎臓を吻合するレシピエントの手術では手技がまったく異なる。今回レシピエントを担当した三宅医師は、「将来的にはドナーの手術も習得したい」と意欲的だ。同院は今後、月に1～2回のペースで生体腎移植を実施、来年をめどに脳死移植実施施設の認定を取得し、献腎移植も本格的に行う方針だ。